

平成19年度 大和市自立支援協議会 精神部会報告

大和市自立支援協議会 精神部会

1. はじめに

精神部会では今年度「精神障害者の支援システムの確立」というテーマで、平成19年8月より毎月1回開催した。大和市内の精神障害者支援にかかわる事業所ごとにその機能や課題などの情報を交換し、それを整理したフロー図を作成した。今回のフロー図の作成にあたっては、対象者としてもっとも多い「統合失調症」に焦点を絞り検討した。

2. 現状と課題

大和市内の精神障害者支援の社会資源を整理し、その役割を点検するという作業を通じて現状と課題が少しずつ明らかになった。

① 精神障害者の特性の確認

精神障害者の特性はその「病気」と「生活障害」を併せ持つことにあるといえる。他の障害と比べても医療機関との連携の重要性はひととき大きなものである。そのため、常に医療機関との関係を考慮し、それぞれの支援機関が医療機関と連携をとる姿勢が必要であると確認した。

支援機関が対象者の状態の変化を敏感に察知するだけではなく、他機関での状態を知る事も必要ではないかとの意見も出た。対象者に合わせて支援機関の役割も柔軟に変化できる体制が、精神障害者を支援するうえでは重要であり、そのためにも事業所間での相互理解をより深める事の重要性が確認できた。

また、各支援機関の対象者は幅広く、「精神障害をもつ母からの児童相談」など一事業所だけでは対応できない家族ぐるみのケースも多く、精神障害分野以外の他機関との連携も必要であると確認できた。

② 相談を受ける機関の役割の整理と相談員の資質向上(人材育成)

各支援機関の役割を整理するなかで、「相談」については複数の機関でその機能にあげられているが、その「相談」内容には若干の差異があり、その整理をより明確化すべきとの話がでた。一方で、利用者からの悩み・不安の相談窓口についてはただ傾聴することが相談とはいえず、そこには対応する技術も本来求められる。そのためにも相談員の資質向上に向けた取り組みの実践が課題となる。

また、対象者からは「就労をしたい」というニーズもあるが、実際には本人は就労以前に生活支援を要することが多く、相談当初に対象者が求めるものと実際必要とする支援においてはズレが生じやすい。

さらに、対象者自身の活動や対象者の悩みや不安を聞いてもらえる「話し相手」としてのピアカウンセリングの重要性は確認されるが、実際にそれらの活動をどのように支援していくのか、また特にピアカウンセリングについては地域レベルで準備段階からどのように動き

出すかが課題である。

③ 日中活動の場の不足

精神障害者が利用できる日中活動の場が市内に少ないために、「病状に合わせて資源を自由に選択できない」、「事業所としても支援する上で定員の関係により限界が生じやすい」との意見があった。一方、インフォーマルな活動のひとつであるボランティアグループが実施している「憩いの場」が大きな成果を挙げていることを確認できた。対象者からのニーズも高い「相談できる場」「憩いの場」については今後どのような事業展開が望ましいかさらに検討し、その結果を自立支援協議会に諮っていくことが今後の課題である。

④ 精神障害者への理解

同じ精神障害者というカテゴリーであっても、起因となる疾病によって支援方法も異なるため、支援者の資質向上も課題として意見がでた。障害理解において支援者（事業所）間で共通の認識をもつためにも、支援者を対象とした専門研修の必要性を認識し、10月26日に精神部会が主催となり「精神疾患の基本理解とその関わり方」も開催した。

また、居宅介護事業所からも障害理解の困難さを訴える声がでており、さらにはボランティア活動などの地域の支援力を高めるためにも地域レベルでの障害理解推進も重要である。地域への啓発活動の中心はどかが担うのか、実施内容や役割分担の具体化が課題であり、今後協議していきたいと考える。

3. まとめ

フロー図を作成するために各支援機関の機能や課題の情報を出し合う過程を経て、支援機関相互に理解を深めることができた。支援機関同士だけでなく、医療機関や他の障害分野も含め、精神障害者への支援にあたっては各機関との連携の重要性が強く認識できた。さらに、毎回実際に顔をあわせて検討してきた結果、連携がとりやすい環境もできた。今後、本年度確認できた課題のうち、どの課題を早急に、あるいはそれぞれの課題について、どのような手法で取り組むかを協議し、次年度の部会の活動に結び付けていきたい。あわせて、相談員の資質向上に向けた取り組みについて、具体化していきたい。